

周藤彌兵衛翁物語

村尾 靖子

三谷権太夫

権太夫は、半時（一時間）も工事現場に腰を据え、じっと工事現場を視察した。

「御家老さま、このようにちっぽけな現場にお運びいただき、このように熱心に見ていただきまして、恐縮至極に存じます」

彌兵衛は深々と頭を下げた。

「彌兵衛、大義で有ったのお。いろいろ苦労も有ったろうに、身代まで投げ打って村を救おうとするその気持、天晴な行いであるぞ。川下の村からの反対運動も有ったと言うではないか。解決はついたのか」

権太夫は彌兵衛に労いの言葉をかけた。それは慈愛に満ちていると彌兵衛は感じた。

「ご家老さま、そんなことまでお気に掛けていただきましたこと、勿体無いことでございます」

彌兵衛は張り詰めていた気持が突然、崩れそうになり、胸がいっぱいになった。

村の民や自分の息子さえも理解しなかった彌兵衛の気持を家老の権太夫が解ってくれた。それだけで、彌兵衛の今までの苦労が報われた気がした。

彌兵衛の心の中に祖父の家正の言葉が、不意に浮かんだ。



画 寺戸良信

——人の上に立つ者は、今だけを見てはいけない。何年も先を見通す目を持つことだ。村の民も、きつと解ってくれる日が来る。最初の一步が有るからこそ、次の一步が有る。今すぐに解ってもらおうと思うな、のう彌兵衛、子の代で、孫の代で、ここに住んでいて良かったと思える村を作らなくては……」

権太夫と家正の顔が、一瞬、彌兵衛の胸の中で重なり、彌兵衛は、ふと我に返り、慌てて権太夫に川普請の説明を始めた。

「この川の普請を思いつきましたのは、私の祖父の家正でございます。祖父の代にも、いろいろ苦労が有ったようでございますが、松平のお殿さまの庇護のもとに、何とか工事を遣り遂げたようでございます。その普請も、度重なる災害により、新田は壊れ、古い川の土手も決壊致しました。この度、祖父の志を継ぎ、やっと切り通しの幅をもっと広くすることを思いつきました次第でございます」

「そうであったな」

権太夫は、彌兵衛の話に熱心に耳を傾けた。

「川下の村にも迷惑がかりませぬように、水量が多くなりました時や、工事中に川を堰き止めました時は水量の調節を考え、一部の水が古い川へ落ちます設備を考えてございます。それで川下の村人たちも納得してくれたようでございます。建白書に書きました通りに、工事が進みましたら、古い川の跡も、この水を利用して、たっぷりと水を張った良い新田に致したい所存でございます」

彌兵衛は、今まで誰にも打ち明けることがなかった胸の内を権太夫に熱心に語った。